様式第２（第９条関係）

政務活動費成果報告書

令和6年　7月11日

犬山市議会
議長　柴田　浩行　様

議員名　鈴木　伸太郎

下記のとおり、研修の成果を報告いたします。

(1) 年月日	令和6年 7月　8日(月) ～　7月　9日（火）
(2) 場所	大津市　全国市町村国際文化研修所
(3) 形態	会派（　　）：その他（　鈴木のみ　）
(4)内容	研修「世界情勢からわがまちの未来をつくる」 報告書別紙
(5)成果・提言	報告書別紙

犬山市議会
受付
6.7.23

研修報告　令和６年７月８日～7月９日　　全国市町村国際文化研修所(JIAM)

研修「世界情勢からわがまちの未来をつくる」

人やモノの移動、受け入れ態勢、海外情勢から 10 年後 20 年後の地域の暮らしを予測する。地方公共団体の議員として、世界情勢というテーマは大きすぎる面もあるが、現実に地元で起きている課題に直結する面もある。地方議員としての視野を拡げ、将来を見据えた活動をするために、今回の研修を受講。全国から 80 名の首長、議員が参加。

○中国との関係を通じて、日本が生きていく道を考える　前駐中国大使　垂氏

日本は、あらゆる面で中国との関係が切り離せない。自動車をはじめ輸出産業が盛んな当地はなおさら。

中国人の日本に対する考え方はさまざま、都市部のインテリ系・富裕層は日本に好意を持っている。逆に都市部の非富裕層、農村部の労働者階級などは、日本に反感を持っているケースが見受けられる。農村部の国民は、中国共産党に心も金も支配されているにもかかわらず、中国共産党を応援するといった矛盾がある。情報統制がされており、意思を操作されている。処理水問題の際、大使館に毎日 4 万件近いいたずら電話があったが、電話している国民のほとんどが、海を見たことすらない。

つまり、一枚岩では決してない。むしろ、日本との交流がある経済面学歴面でハイレベルの国民の多くは日本に好意的であり、その関係性を両国間で醸成させていくべき。

漢字をはじめ日本の文化は中国の影響を受けているが、そればかりではない。科学で使われる漢字の用語の多くは日本で作られた和製漢語。インバウンドの中国人は今後も増大する。

今後も日中間での駆け引きはあるものの、両国間の良好なパイプを大切にしていく必要がある。

犬山市への提言

自動車関連、工作機械関連等、犬山市内企業も中国との相互依存は強い。インバウンド受け入れも大切。政治の世界の日中関係も大切だが、産業レベル、市民レベルでの友好関係は大切に維持していくべき。市民の中国に対する意識改革をすすめるべき。

○外国人の受け入れと共生社会の実現　　（公財）入管協会　佐々木氏

2060 年には、日本国内における外国人比率は１０％を超えると予測される。技能実習・永住者に加え、技術人文知識国際業務ビザで入国する外国人が増え、

今後はさらに就労する職種の拡大、来日者の拡大が予想される。日本は少子高齢化で間違いなく彼らのマンパワーを必要としており、今後の受け入れ態勢整備が求められる。

2024年からは、「外国人総合支援コーディネーター」制度が導入され、入管レベルでも、入国後のサポート体制が整いつつあり、その点期待したい。

今後より一層求められるのは、外国人との共生社会実現のビジョン。入管では①円滑なコミュニケーションと社会参加のための相談体制等の強化、②外国人に対する情報発信・外国人向けの相談体制等の強化、③ライフステージ・ライフサイクルに応じた支援、④共生社会の基盤整備に向けた取り組み、を重点項目に挙げて、令和8年度目標に取り組んでいく。

日本が外国人に選ばれる社会・地域・職場・学校を我々で構築することも必要。そのためには、①地域の魅力を存分に発揮する、②手取り足取り、日本の文化・ルールを教える、③賃金など、日本人と外国人との格差解消、④外国人の存在が、地域の当たり前になっていれば大丈夫、⑤しかし、いざという時のセーフティネット構築は大切、など。

これまでの日本人は、外国人在住者をよそ者扱いしていたが、日本人が心を開き、彼らを真に日本社会へ受け入れていく意識改革が必要。

犬山市への提言

犬山の外国人は3％、今後もっと増えると予想される。入管については、外国人に厳しい対応をしているイメージがあったが、いよいよ彼らを真剣に受け入れる方向に改めたように感じる。それに沿うような犬山市独自の先進的な体制づくりが必要。現在の「多文化共生推進会議」等の活性化、「多文化共生推進ビジョン」を「多文化共生推進プラン」に格上げすることを、今後も強く求めていく。

幸い、議員間でも多文化共生に対する気運は高まっており、オール市議会で取り組んでいけるような雰囲気づくりを目指す。

○グローバルな視点から考える地域のスポーツ　大阪大学　岡田氏

近年、かつてないほどスポーツとまちづくりの関連性が語られている。犬山市も数年前に新たな体育館が建設され、その他スポーツ施設も整備され、市民ニーズに応えている。個人的には、地域づくりやコミュニティづくりにスポーツを絡めるのは大賛成、ただ、誰もが参加しやすい環境でないとうまくいかないのでは？と思っている。これから先、スポーツに関連してどのように地域活性化を図っていくか、そのヒントを探った。

講師である岡田氏は、南スーダン、タンザニア、ジンバブエ、ボスニアヘルツェゴビナ他で、地域にスポーツを定着させる活動をしている。多くが民族差別、内線などで人身共にすさんだ環境からのスタート。スポーツを通して、平和、融和を浸透させてきた。

東京オリパラでは、タンザニア選手団の山形県長井市での受け入れなど、スポーツを通して国際交流を創出してきた。

そのような視点から、日本のスポーツ環境を見ると、日本はかなり特殊らしい。特に、今、大きな課題となっている部活動の地域移行に関しては、その世代のスポーツに対する考え方が国によって大きな違いがあるとのこと。

「子供の幸福度ランキング」世界一位のオランダは大人も子供もスポーツをする。香港は「国土」が狭いためスポーツをすること自体が高コストである。カンボジアは内戦の影響で指導者が不足しており、環境整備が経済成長に追いついていない・・・等々。

競技スポーツと生涯スポーツとの考え方の違いも参考になった。日本は基本的に勝ち負けが重視される「競技主導型」、米国は競技スポーツを生涯スポーツが分離されている「分離型」、オランダは競技スポーツと生涯スポーツが混在し、どちらも行き来自由な「行き来型」、ノルウェーは、子どものころはさまざまなスポーツを体験する生涯型だが、成人になると競技と生涯が分かれていく「生涯主導型」。

日本のスポーツの考え方は今まで通りでよいのか疑問に思った。

子どものスポーツを支えていくのは誰か？　今までは教員の犠牲の上に成り立っていた学校での部活動、これからは地域移行していくのだが、地域、個人、企業、大学などの負担は増える。国や地域がどれだけ役割分担し、責任を明確化することが必要。

スポーツを通して、子ども達へ何を期待するのか？競技力、仲間づくり、気晴らし、体力向上、礼儀マナー、成功体験、居場所、経済的便益、コミュニティ・・・明確にすべき。

犬山市への提言

・地域移行に伴い、中学部活の意味、考え方をもう一度見直すべき。

・スポーツの範囲を枠にとらわれず広範に考えるべき。ハイキング、キャンプもスポーツ。散歩や街歩きもスポーツだと考えれば、通勤通学もスポーツ感覚になるかもしれない。だとすれば、たとえば都市計画で「歩きたくなる街づくり」を標榜していくことで、魅力ある都市空間を作れると思う。公園やサイクリングロード整備もその中で語られると良い。最近提案のあった、自治体ライドシェアの該当地域も、最寄り駅までは川沿いの桜並木が続く快適な堤防道路。このあたりの考え方を変えれば、地域とスポーツがより近くなると思う。

・アジア大会が控えている。ロンドンオリパラで英国が成功させた文化プログラム、東京オリパラではほとんど動きが見られなかったが、アジア大会で犬山という歴史文化都市がどのように文化情報を発信していけるか、注視し提案していく。

○アートや文化で地域を豊かにする戦略と実践　膳所焼窯元　柴山氏

大津市で膳所焼の窯元としての営みをしながら世界に日本文化を発信しつつ、その価値を上げる活動をされている氏から、日本の芸術の位置や今後のあるべき方向性を伺った。

納得する部分も多いが、個人的には文化を金に換算するような内容で（テーマ

がそうなので、本質とは違うかもしれないが）少し違和感があった。
　概ね、日本は安売りしすぎ、海外からのインバウンド客に対し、積極的に売り込めば、地域が活性化する。

犬山市への提言
・講師は膳所焼窯元、犬山焼でも着地型観光で一日体験し、後日作品を送付するというスタイルが出来れば、状況によっては一人２００千円くらいはとれるとは思う。二の宮みかんでも着地型観光を提案したが、犬山はまず、そのようなプランを作成する人材育成からスタートが必要。先は長い。

以上